うのゑ
きらの蔵旦

吉細
さしゑふ

まくこ

911.3
ツ

あらたまる年のはしめの袖ふるす　東都 八十六翁 筆栽

きゝみ出る猿のやさしや獅子の花　七十二翁 青宜

袖ふれし小袖乃香つ年欲せられ　採花女

門松や皇国の千代城涼みとり　孫郎

え日に似年似ぬ二日との部　岩瀬 壮山

小松ひく連にやゝきのふ　七十六翁 思山

きつ鶴や夜明にちかき紀川の音　桂洲

白きすの海の若や汐路の裏　何来

まり唄ややそふらぬ香の豊かしき　三樹

春ふやまを新らしきたゝみ　桂雪

海原に大きつのほる初日の影　青斎

古道ちる

いつゝまでを花でありたし福寿草
酔魚にあきる日出度清慶の船
万才に葉内のつくや仲の口
柏手の音につゞける川のうす
貴神の子供や凧ののぼる大灯
空に射し矢通矢地にかへるのぶ
蔵夜をおろゆきめぐりきつる霞
森さく浦や夢は去年宝船
草鞋にて山家同士の節慶に
輪つなぎの一つ独り利初雪哉
吉日たる扇子ひろげて花の春
雲のまもあれも往来の賑き年始に
貴ぶや夜の明ぬうち一とゝのり

半昭
立共
一鳥
濤雄
露山
菜里
昔山
秋鳥
幽氷
静丈
止笑
松山
菇月

いち先に若水汲て事こゝろ利
年玉のおくり物も花や松の内
松影の門にも白妙や去りける日の本
もつましき親子揃ふて屠蘇の酔
えらみや旅にもあれど神祭り
清浄や室みのまつり神しき家の白し
菜えしろの宮に嫁し初子の日の郭
書初やあらたまの名の筆はじめ
あさくまの張に鈴やまるうさぎ
えりやしまふなるほの幼しまゆ
面盤の宮居くるしう一夜屠蘇の酔
松風の中にも響くや謡ひぞめ
神楽しの影うつりけり鏡餅

曙山
辰山
氣山
清月
岩山
静鳥
晩雄
道遊
玉嵐
園舟
雲居
精女
知ち

おもやの小雪のまろろや四方拝　盲人 中州
万歳のとつきりおろきふくろかな　秋雨
曇り若紀り船のりをさしや千代の春　子月
若きやの小脇にゆふし初の了す　花蝶
七種のそやしむろこる小家この事　粧雅
一筋ハ空いろやそのつふす　松音
嵩の小味あるても名の初のそを　北斎
色もよき名をよぎ花や福寿草　都芳
数の子や色とりそも神籠めく　菜園
送りふ去て送りふへまや来の夜　吏洲
喜ある評状こつしてまろし焼餅　山石
来さ去年の人も通る小初のつす　知辰

去送てつり合ふろや松のあさり　姫秋
のり絡みとり日ハまろこの名の松の内　一陽
柳なかあたる松桂て年きく御髪かな　九十童 和雪
酔ハ改日なおくてゑみり　三ケ日　三止
手線つきやえそ邦次名　紫蘇　半宏
霜山寄せ冷輝と名の名残かり　鴬鈴
そ川のさふ子ふき一筋ハ春の水　岩女

かのえとら　元旦　之去

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島

正風俳林舎

菜女も
遊織なり
花ゝの里
嵐雪

菁秋舎家道撰

旭にきる餅をまてしおく誰が家の鶏　座起
夢ゆるし岩に作し春の四つや　茂兵
ほうし秋代一本ちるや花ゝ城　花翠
残雉の音ぞ絶ぬまゝのこゝの春　一笑
きる如此になる春ものゝ月　葉国
草前如一とせ八めかり夜火のあと　一来
東風のふ鮎も躍めてさのうへの茶　高ちあ
傾くと如此ほは根の橋の那　豊山
鳥ふしの一とさいふ如やけしふ鰡　寿中
浅橋の蜂大ふし　其の自　氣山
池の面如ちさかる見ゆ葉の風　秋来
一本の梅ふ要ある中葉の華　粮雅

春の月なかめきて渡辺の郷　同寛
咲けハさや散る日床しき桜かな　再児
魚串の鳥る白山や桃の露　素里

秀逸

花に世城あの娘の山の森をみけり　去冰
陽炎や千鍾種蒔し花をみけり　一陽
刀鋤の房まん風にうつりけり　何来

三光

真の水小魚のすりて去りけり　何来
月花のためありなし二ケ矣　守窓
諸あをし能世々門や春の月

○

垣根まて霞らせけり山の家　補助　菁冰

菫咲垣根一重やまゝ田川　其芳
菊なかに月よりあまる秋の垣られ　幽水
梅咲やまだ世に影まさる汁の馬　佳洲
影高くも霞の果山を春の月　淵月
夜通し川岸の後否の後へ春されれ　寄山
散らんとゆしおくて更に月の梅　小洲
砕きかれ咲れんや若葉の風　若明
数篇も水の流れし春野になれ　静山
東雲の出るいさましく散るはなれ　三止
菫道は花まとまるや兵の家　苔水
梅咲やむかし茶へ舟より　謙月
足跡を小田に残して帰る雁　海心

春の月ひとゝかすみて濃達の郷　月家
咲けハ又やがて日高し桜かな　再児
魚串の魚る白山や桃の露　素里
秀逸
花に世城志の姫の山の霞かな　苔水
陽炎やまた種蒔し花ちらけ　一陽
引鶴の声まつ風にうつろひけり　とゝ也　何来
春の水小舟のたりて去りけり　何来
月花のためありしに二夕夜　何来
訪あそし能登ヶ門出春の月　守窓
○
垣根まで霞ませけり山の家　補助　苔水

と年また斜ゆりやさゝれ鶯

○

わら鞋をくんで春るや夕月夜

おぼろげや墓の跡にの集中

○

花清や立第き日の中ぶゐる

初桜後に出塔の思ひ出の郷

垣戸やちら散りて庭の其の水

其の表も鶴うひて屋の初蝉

門川や柳さなのゝ散る水

鶯や菊のハ不節て日に旁菁

鶯や其ゆる散のさをまちり

補助 行来

備立 三止

〃 出窓

判者 須賀川 壮山

三河 蓮宇

出雲 曲川

東京 永機

西京 移史

大坂 鶯笠

東京 梅年

冬もさえて川ふしき出来の白急の郷

ゆうりある野辺とハ為り奴梅柳

其の一ノ御難賞とハ菊かゝゝ

者清津に穀のうり川神の花

〃 琴香

〃 踏平

悠山

袋蛾

明治廿四年四月吉 第四十四回

稲荷神社奉燈

月並句合

岩代福島

正風俳林社

苫屋にみる
押あひぬ
浅迄宮　翁

陸沈堂宗匠撰

行秋や実入きつめる茄子の味　柳芳
蛇の消て夜寒うなりにけり　蒲堤
若いくと流されありし秋の月　共楽
瑞路のやうに戦くや虎耳草　高子代女
背戸近く麻の末にて見る夕べ哉　小国 清山
松もと木ありて紅葉色やうすの身　豊
雪際の声きれいなり竹の花　棋圃
寄て鹿てまた寄る鹿の遠音かな　五十山 黄山
小夜ふけて妻乞ふ鹿の遠音かな　つみ彦
浮雲を掛稲にして治まりけり　思桜
子のきんへ遊ばし菓の日大かな　備月

秀逸

秋風の節と成し宮さかり　吹香

風鈴のたえてましるや秋の雲
影うつし隣へとゞく竹格子
温泉もとりの足のうろさよむの原
山川や冬を隣の水煙り
つれ〳〵の中に暇ハし色の節
伊や水の色にと龍田乱め
松むと木つれあきもや九月堂
当船の入るや天氣もよい日並
若葉の聲吉に今影肌寒し
見るたかふらほし山田の稲の花
懐ちて猶女こゝろ謎る夜寒かな
可生てある稲にのくまて秋の行
行道もちてちくえぬる惠髭かな
月あまし庵花か上に折りけり

淀芳

若水　秋雨　三上　寄山　真香　半窓　晴遊　米窓　円　良窓　慶遊　稚雉　松山　世洲

うるはしや糸引竹の花に露
都にハ住とも秋の夕かな
夜ハ露のやどりとならや稲の花
白菊や露をもふましをの数
身にしむや雨の絶しまし風の音

再考

行あらぬ木のにのえかる花火かな
浄手洗に水輪乱るる木実かな
ちの日和や稲の刈仕舞

呉井園宗匠撰

はてしなく海の廣さよけふの月
天地のめぐみ多し稲の物成
秋の水ちり乱もつなく流れけり
白菊や露も枯さぬ影のうち

一陽　何来　桃雉　寄山　一陽　青柳　佳洲　中洲　文石　幽水

庚坂

花翠　可遊

蘇枯らきて煙竹香夜や茶立虫　雲鶴
咲桜にもあはらしや女郎花　豊美
元来仕出あつかうしき名なりけり　青壽
柏手の頭にたつや稲すゝめ　角洗
聖うに出て聖に納るや初あらし　愛山
さまよくに富もかなりて秋の暮　黄山
新米の香に神も風も悦くみけり　識月
擬て見るつねのつめ冷し秋の暮　庭坂　榴石
ふ見あき秋を庭なり稲すゝめ　太珠

三才

松風の音とかくきて露時雨　杜維
鶯も来さうな日あり作の春　一陽
名月や清く流るゝ水の上　月窓
○
亀丁精やもと雨ふらしの日和哉　若水
戸や引ん紫やや焚ん秋の暮　何来
○
庵師へ先づとゞける新酒哉　催主　三上
おしなへて秋草なり稲の末　半窓
○
赤らむと稲に吟なき谷の廓　判者　袋錦
名月やうへなく晴て言葉なき　三ケ　蓮宇
○
ふとされて宮春に咲ける三ツの花　七十九叟　恐山

明治廿四年十月　第廿六回め

稲荷神社奉額

春並句集

岩代福島
正風俳林社

陸沈堂宗匠撰

枝川に流や秋なるの日を星

雲の峯の上より出けり杖の月

吹分て水さへ見えぬ稲の末

虫啼や一足つゝにかはりゆく

鶏頭やさて物縫の世をしらぬ

岸の香の何ともなしや蓼の秋

焼しさや田は色杖と稲の色

蕎の實の音にかよひて秋寂し

月高う雁はしぐるゝみを旅

秀逸

朝かほの日和句かや稲刈かな

秋にまだ暑し松に来る氷賣

八朔や風にさそはぬ朝嵐

北洲　恩挟　雲鶴　小国 豊　高姿　陸前 晴霞　柳芽　米甫　春香　嵩山　何来　佳洲

一

秋風や
ちらすもの
月に
影
ちらし

去来

刈初る田の面も手元見えにけり　晩香
跡来の雨にほまちの根なるべし　楷石
稲舟や着てもうごかぬ腰の縄　三嶺
むく起に箒もちて軒の秋　半窓
人込を出て見上るや秋の空　虬哥
桐まで落ち残りたる枝はなし　苔水
鴫の立つ稲穂に迯て空稲匂ふ　仝
一ツ家に備ふ灯は見えて鹿の聲　誠月
月渡る水も残らず庭の池　庵遊
寒さや霧を重ねる外の外　静煙
夕照のして照りつつ紅葉かな　柾雅
鯛や鮎見ゆる日和雲　秋雨
秋の庭に音して桐の一葉かな　苔水
瀬の音も静に暮て露時雨　一陽

裾さきを人の見つけて星の集　晴遊
梢あまて咄しも竹は樺しき　苔水
吹けしより秋の立たる沖の陽　一陽

感賞

市中へ来ても吹く人秋の暮　晴遊
鈴虫や小鉢ある菓の先　苔水
霧の中見え隠れして稲の花　柾雅

樗庵宗匠撰

月漏るとその穂の中に有　青竒
朝寒や露見るやさき軒庭　止笑
身に沁し夜々の上ぞ外の影　秀逸 可遊
夕風に一際涼し虫の聲　次上 蜀月
名月や幾年経し同じ照り　氣山
樵の手日和となりて稲の花　松山

晴れ北窓に遠音の佐かりけり

秀逸

此里に一の支東門の稲
白雲に紅さす秋の日和かな
蔓艸にからまるも甲斐し初嵐
ねきさとを人も見せて星の歎
蚊の聲の遠く成りきりけり
秋なれや隣見え遠く生垣
虫の音も寂しかりけり秋の聲
名月や網に粘く人の影
虫鳴や床まで椽に端居して
ありくと樹影見ゆる月夜かな
古沼をも惜みて修む寄の萩

詠月

壽山
何来
秋雨
陽遊
梅煙
晴遊
棋園
黄山
若水
枉雅
指石

やとり木ハ山より留まる紅葉かな　壽山
月ハ諸方八荒なく空にあり　幽水
夕立の跡して行や水の音　蘭堤
八朔や風も手向る稲の艶　佳洲
神垣の前とよりかゝや紅葉かな　補助 若水
来る秋を迎ふるや庭掃除　何来
こぼれ穂にまるまると稲の庭　催主 三止
焼けや霧の末深き山の夜　半窓
名月や闇を浄さるの松島　判者 袋蜘
分の木も陳ることも松の月　全京都 七十七翁 稲處
鶺鴒や神の衣追て庵の休み　七十九翁 忍山

明治廿四年九月分

第二十五回目

福島町慈恩寺観音奉燈

月並句合

催主

[seal: 雅莚]

四喜庵宗匠撰

なかまとも交る鶴寒き光り義式なり　庵遊
ちらほらと小松も有るや枯尾花　映香
掃よせて積るか早き落葉かな　黄山
枯草の消えて野末や雲の花　止笑
閑居の閑にあらし巨燵かな　雲霍
冬枯の外に去年はさびしの音　春雨
家々菜葉法焼しの映りけり　高千代め
遊ふにも我呼寄して神臣達　青柳
心面に事なし紀念や浮森る　思梅
午時中を木陰もうける小春かな　棋圃
豊かなる冬田にあるや稲の株　東京 里草
舩乃竹の水まこぼるゝ千鳥かな　〃梅レ 花泉
響く川てはかり北暮まし水田かな　〃 花丸

袖雪や出もつける薬代がわり　松山
埴一金待ちて来あり三十三才　半窓

十印

帆綴まる風に居直る千鳥哉　東京翠レ　青枝
ひとつ川ゝまよられ振らず霧の籬　自由
松風をうしろは庵の巨燵かな　青枝
家かくぬ花の志帰りや冬ほうゝ丸　ゝゝ　胡蝶
一時雨通りし跡やまとのつき　苔水
掃人も見られし木葉哉　桂雅
盛るゝ径明るとなりぬ雪の山　ゝ梅レ　花好
背戸見覚を流る小はるかな　誠月

十二印

松風をゆるは分し又ちよ千鳥　胡蝶
咋しこは咲力あり帰り花　苔水

庵巻

幼知園撰

正五印

字いふる言葉跡なき寒さかな　春雨
秋毎来て未ぬ秋の淋し寒念仏　狂雅
雪竿に登る旭の雫かな　秋雨
限板もなられひまなき小春哉　松山
木からしや林下は尺する破れ笠　止笑
交る秋は出もつましま巨燵　春雨
巨燵からは巻因や重ね頭　自由
降止し風情の枝や雪の月　花好
月は過花を待気の雪見かな　狂雅
炭を継で新しうなる出かな　花水
最もうるわし明かしぬ雪の山　花好
年時降この乾や帰り花　東京梅レ　樵園

蟻埴を出て道すがらなは　一自由
月旅して松影寂し小窓哉
六印
身は隠れ礎なしも旅の乙　自由
湊着れ愛や付添ふ智仁勇　丶
まい年ㇾ回る浪や鉢うろき　三止
送られし人はいつの雪の杖　自由
芦笛や身を添ふ葉は吾ながら　苑水
世を捨し身の生業や網代守　狂雅
茶の花や画をはなれて日の白く　三止
感吟　七印
追ひて静な名残り雪の松　狂雅
〜花の盛りや冬牡丹　胡蝶
膝つらむ友も何事し線と計　狂雅

旅巻

○
秋雨の起されてころ寐ひけ郎　補助　秋雨
山茶花やほかにも咲ぬ葉の上　三止
散鞘めて谷ゆかしき紅葉哉　芳水
○
待人も来ぬまに折し峰の寺　催主　謙月
祐はれのそぶ程に降まかり　虹音
珍しき人の来るやその梅　狂雅
○
嵐にも離れぬ紅葉の書かな　花春　東京　青枝
野鶴の低う残りし夕の空　若者　祥作
○
山茶花まさへ浮明かや阿耨多羅　七十九翁　忠山
足すゝみ力見へて大根引　袋蛛

福富町慈恩寺観音堂境

月並句合

催主

明治二十四年十月十日堂境

十二月分前評― 蔦点 一 中十二 中二 〆切

有隣庵宗匠撰

見るものゝ光る秋更や三ツの花

あれの旅ゝ跡や榾火の燃へのぼり

鐘の音まやつと暮れり雹乃声

何となく物静なりゆきのちら

松のいろ一ときまして小春かな

井の水の秋まあるや冬こ玉梅

小高くは日の出ほまし冬の梅

秋も月もさえ渉りけり霜の上

漁り火の右と左りや濱千鳥

山松のちつかや鷹の道ゝ行也

秀逸

戸口まで俵か孫て冬ごもり

山茶花や野の何も染まして

石京 庵造
里艸
思梅
誠月
春雨
子千代女
半悟
義富
止笑
半窓
月画
秋雨

鷺一羽下りて眠に立冬田哉　若丸

山茶花や紗風を隔る梅の内　松山

東京

薬種干縁にぬくみや冬のうめ　自由

隠居から茶光ひ更る小春哉　狂雉

枯木にも契ある秋半そ来芸哉　三止

文机に用置てあるふたつ哉　狂雉

感吟

寒菜や植根にのこる落日影　若水

東京

木兎啼や風に夜こる丘の松　青枝

大雪や軒にちくぬく杉枝　若丸

旅壱

陸沈堂宗匠梳

○

再考

月さしてあ音高く夏にくき　月画

晴からぬ幽はかりや焚榾火　青枝

松風の交る音あり小夜時雨　若丸

榾焚て都見へしと己ひこ成り　青枝

合持の分ひもりし寒の雨　晩来

再考

さゝ啼や日に疎まぬ草の奥　青枝

枯木にも契あり秋半芸哉　三止

文机に用置てあるふたつかな　狂雉

旅壱

幻庵先生評

○

十評

提灯に音れこほるゝ霰かな　里艸

岸にかゝる波音凄し啼千鳥　青枝

小村へつゞく枯野の暁さむ　杉雨

くふきうと思ふ日和や帰り笠

蜘耳きやおとろく出来た遊びふへ

男の腰ゆやいくつも恭さやうた

○

和田浦海の波平寄り小六月

吹あらし袖に払菜の楪挨り

○

京桜やゆふあふうら日も伸る

秋は寄まるりて替や年の瓶

土こねの一人話し蔵菜かな

○

散銀杏つもりして海老堂

補助　花石　三上　莒ふ

催主　泮月　狂雅

判者　孤邨

東京評　相袋　蝶々

七十九翁　悉山

蒼巷

恒一重惟て来くる　三十三才

也ら几一て居るや布袋の角兵エ獅子

風呂場のふ生きいきるや燕の㒵

女房は八幡ちらほら鮫の浦

ひつきつけ綟る又かへるさらへ

隠れのふ茶邊叉る小まかく

ま院のふ出て長椽の露さかる

日海り出れてふくる残花哉

秡い菩の縁芝残さねふらし哉

寄竹十二章

胖の葉ふの窓ますれ途ふ意哉

まく白て珠文さい一帰り笠

松ま色ますして菜の数まで

○

米宛　自也　青枝　句由　松山　狂雅　串窓　一場　句由

一場　甚ふ　狂雅

明治二十四年十二月十七日来地

本月分高点

中 △ △ 生 △ 生

芸所

同村郡南風田小未田
村社春日神社奉額句合

天 三十四、房紫　地 二十九、双衛　人 二十七、路貫

廿

二十七、鬼孫　二十二、みや女
二十七、松露　二十二、半窓
二十六、松湖　二十二、三止
二十五、柳月　二十二、好文
二十四、丁翁　二十二、そろゝ女
二十四、一陽　二十二、此登志

客

二十四、井蛙　二十二、笑山
二十四、枕石　二十二、湖晴
二十二、橋姓　二十二、芳促
二十二、稚竹　二十二、陸山

京都花之本稲雄宗匠撰

五印の部

門に馬立せし[illegible]新緑の札
心から[illegible]咲[illegible]
咲[illegible]本の[illegible]の[illegible]
[illegible]夕日の[illegible]
川筋を[illegible]
[illegible]の句[illegible]
星見えて[illegible]
炉[illegible]の[illegible]や[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]の[illegible]
雨[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]
[illegible]

松サワ 凹成
内出 梅友
松サワ 千柳
坂ナリソ 北岑
、宗山
二井タ 光山
サヽ山 川月
石ノ元ソ 雅立
坂ナリソ 花鳥
乙マツソ 鴨寅
松サワ 松泉
シマツリ 堆山

山一ツ芽ぐみかゝきさくらかな　　アラワダ　芽幹
山越えて人里ありて梅の花　　和田　義睐
松原を見こけ急ぐや友の旅　　七タキ　竹良
嫌てなまた捨ぬ哉や子規　　和田　花蝶
はなれては見えぬは隠れ神泳　　平サワ　元峯
見送りたる伸る茶つ利花の峯　　オニウタ　旭峯
荷莚して思ぬ里を見つ宿　　新タチ　一章
気にかゝのきもを遊蓮見る　　オニウタ　昭江
住み娘の来る来ぬ門よ初桜　　拱田　袮泉
嬉しきや寒れ暮る日も冬りぬ　　北ナリタ　夕山
松が枝も寿可身もち志る底ろ　　東山　遂静
雨晴てしむの重さや門ほとよ　　ツネサワ　登山
蝶の来てもゆる是一番　　井ナサワ　三笑
ゆかし里け端のゆえまりしき　　ムラ　蘭玉

都なり軍して出門の梅見人　　十カワキ　竹よ女
雛子聞やまだほのくらき縦縁　　ウキサワ　雲庵
桜川春を待ちえてまた花　　冨岡　旭山
戯く欲伸る中う之年外　　ツマツ　計道
その閑く気ひ見付千熟柿　　、　一山
去年まや寒く翻る露の香　　相馬中村　白嵩
世の春るのを新る神の言語　　二井タテ　高月
うつとりと静な秋人揖る雪　　、　淑柳
奥深き宮陸の寒や誠の露　　、　松年
夏行と思ひなうて舞踊　　又八番　勝見
何見る功煙行をあし初霜　　、　平亭
郭公濡つる軒て端ま経　　二井タテ　安達　アラ井　一寿
渇せとき僅し流る野の清水　　、　こつ女
来る人に揉りて立やまた夜　　友田　清芝

梅咲も改まりけり四才鐘

枕まで綿を縫しせる柳かな

白妙の流れ添ふあまの山路かな

照り込む日もさえ忘れて夏の扇

菊代やし遠眼鏡白帆の月

なく顔乳呑竹も鮮くて花根哉

嫁も早女心をつくし盃掃

白菊やわずかにの一ト位

朱の戸に香を添ふ梅の色

日もまさに梅も力の入て来る

去三月き萬紅青一つ更衣

船にのり桃の又来てまたり峰の講

茶舟の出も追はで来る時雨哉

雨乳打ち両の軸ちる柳哉

三丁目 新玉
三衣 紫朗
クマガミ 一湖
ツナタナ 花蝶
ムラ 旭豊
ヲマツリ 杉景
かミや 老山
ヘヒ井シ 去跡
サヽ山 安井
ムラ 橋集
下石 勝記
安達白岩 清素
二本松 鯉便
トミサワ 松左

恒の春は香を催し免梅哉

藤張 松

七印の部

朝霞や舞鶴の羽と走り

筑の追ひ波し気まぐれかり

霞ぬる野に芽野かな

目出たさを重ねて嬉し鏡餅

雪の道ひと下萌の隣野かな

鶴飛ぶ風のあやを見る夢かな

月さしてる縁の門を眺め見

梅咲きて梅また明けて蜀鵑

蜂まる笠の根の継子の影

名月や又てあむる寄の音

蜩や夕日れ残る峯の松

星の色も様々まで

二井ダ 香梅
大ダキ 藍州
フクワタ 東秋
大ノサキ 松淵
北フクダ 風雲
トミサワ 旭峰
七ノ井キ 松雲
平サワ 元玉
北ナリダ 橋蛙
フクワダ 寿雲
北ナリダ 春鶴
ヽ 西橋

時雨まてかゝる日のさし入窓　二井タ　廓猿
吟しるさへ寒さありぬ梅に月　フマツリ　非松
拆くとも初紙の音や夜の月　二ホク　竿鳥
花よ見える松に鶴あり庵の雪　北ナリタ　庵武
鶯物や浮すれ寺に掛捨し　ヲマツリ　松風
行年を縁に重ねて夕焼　ヲニウタ　石泉
気陰は上りきてあり菊の色　七クサキ　ゝや女
暮の春も来す月の水き一筋に　ヽ　社月
昇る日や塀のつくまゝ見へる　造限　館亭
初雪やしろき道ぬ下駄の跡　三丸　芽便
里の雪笠見ゆる饑一ツ角　イナサン　羽柳
晴れて光る柳の緑の様　ヽ　山月
日も旬のその気色や初雪　福島　蒼水
月さしや虫の緑た野の端り　芋サワ　繁

見る人も更新して梅の花　北ナリタ　春敢
桂の中に立きて清き朝かな　ムラ　きく女
日の照る中に有りし夜の山　カミ中村　松星
堂しらぬ眠気うして出の鶴　トシサワ　泰雅
いと光き流の音や秋の暮　大田　数月
鮮橋やもみの橋の夜の月　小八ヌナリタ　北明
有明の菊菜も見たる近江見　和田　素暁
学やしずまるる花の輪の花　喜田　清水
星の辞を扇子にかへて見る　ヽ　系燈
総の香の弦匂ふ人の恵し　海山　聞盛
立ち中の香で梅の色見る　上八原　柳水
山寺の本堂に立る木の花　三丁目　八百八
咲そふ花つぼその久し冬の梅　クマカミ　孫月
梅咲や中をさ近所近所の垣通　ムラ　比登志

落てから蜂は又行燈の番
雛鳥や背から出る庭ざくら
来る程の人さへ見えず秋の暮
迷子より足留られぬ大晦日
畑打や里の樓大ゆる月夜
ゝやまた神の社の紅葉まで
田に立ち田へ落て静や春の水
ゆるやかに乾き見ゆる柱かな
湯堂や眠氣さしたる針仕事
冬籠も世にもつきぬ山ざくら
紙燈もともしくれし夜の遊

桜七郎の評

庵ゝ帰や蕎麦賄のとりかり哉
桂の上に降りて味出る静か也

ツケタナ	先信
ヘヒサシ	宗淑
当所	一笑
、	一貫
、	寿山
、	忠山
サヤマ	笑山
大クサキ	義哉
ムラ	千代川
舟引	きま女
ミハル	松岸
福島	丁菊
アラハタ	芳弟

酒の香をたゝし淋しき櫻かな
初雪やすまきぬの山ころも
烏さへ帰り行く跡寒ければ
裸木に空を移れり冬の月
行雲如何に見る日の暮淋しさる

十郎の評

在梅の香や寒く残つ鶴の月
庵ゝ帰や打火鉢と月落て
両晴くなむ寒空あり帰る戸
雛鳥や神も留にと思ひすむ寺
一すまて花まで摘や澤の畦
見る乳母の懐に寝し雪ありけ
小松腰の実までも見えず秋近し
蕾や遊びてゆくも篇在所

ツマツリ	游山
、	仝
ミハル	芳風
福島	三止
本宮	秋石
アラハタ	房紫
ニホタテ	来載
ヒラサワ	向雲
アラハタ	柳月
芋サワ	竹山
ニホタテ	〆子
福島	半窓
、	一陽

酒入ぬ寺ありとをしき夫婦かな　アラハタ 好文
動かぬ深動かしてゐる柳かな　クロカミ 蒼舟
趣の増る小家や朱の花　中村 双衡
ぬくしと像屏風や冬籠り　トミサワ 路賛
陽の移る音なく眠し春の雨　ナリタ 東州
山茶花や濡らしても立ぬ鳥一羽　盛山
連れ立ちし螢見まつらん花の垂　アラハタ え[illegible]女
届くあちこちの方より夜の月　モトミヤ 枕石
積る程譲く見えけり雪の原　シハハラ 貫水
蜉蝣生れ日新に廻る暑かな　ミハル 風柳
憎からぬ果敢なきもの小石集　タカクラ 昇山

桜十郎の部

忘に春ましてめでた柳かな　安達 白岩 稚竹
莚あるよし一トひらも花の夕明り　トミサワ 金花

杖挟し橋の上にて鳥の声かな　秋田 秀山
杖をも秋さの九一紅嫩之梅の花　行方 カシマ 鬼[illegible]
いはれぬ耳すさく入りて相子の花　石[illegible]
気高き心持ち一文木瓜の花　行方 カシマ 進鳥
水音の放きぬしや氷の月　詠水

盛吟

永き日や冬ぬ野の首立鹿つ　二本松 杜良
名月やつんと捨る猿の座　滝井 井蛙

補助

庭下の[illegible]鯛　二本松 椿笠
耕して雪持ちはや梅の花　本宮 文雅
風揚る児も揺れまし桜花　三春 雀笑
一ト雨のむすびてす柳櫻　同 松草
何一茎も忘れて咲くし春の月　タカノス 風山

関取の耕て居る棚かな
葛の香り引起まう心かな
維子帰や十しかの葛の咲頃り
鶴帰や明き斗のく霧のる
葛ありぬ出里もゐえは居る実
藍白ふ露霜も雲の地走る家
其散や居ゐ水ゐ流友戯き

大補

舟の錢遣流れ渡率ゐ春かな
ち長船を見ゐ世ゐ蕾常林ある
蓬萊や子宿の船の着と知る
爪ゐ出る月を出て行人を宝禍
子福者と云まれ嬉し猿か渦し
紫るやかく其の日を雲光しき

補

ハルヤマ	物籠
ミハシラ	一笑
カノエリ	兆左
トミサワ	光月
井ナサワ	松家
七ノサキ	松山
ツチダナ	湖泉
陸前	甫山
岩代	素月
、	綾如
、	駐山
磐城	湖晴
下総	旭齋

催主

枯柳を珠の姿ふ排か
尾花ある松手を出し其の色
雲の光曇く響く谷の音
ひやしと月のかし気を年休
人の居る内を見ある蛍山ふかい
浮しきを船を限らぬ夜の月
山里や窓を覗けり葛の山
能夕と匂し秋の移る雲家
名月やちきれて走る世の道
ちい松りと音も世の松の枝香
雪降てありて柿の木庭
柿ゐつてきぬまる見の心家

發起

秋	月
旭	濱
封	月
蘭	草
水	泉
豊	舟
秋	穂
興	吉
秋	山
市	治
寛	橋
瀧	車

只居てる草臥ありか日永かな　　南濱

打つらしや角落したる鹿の画　　橋石

朧根を未履修通る人も誰　　秋湖

近蝶に覗くし見えし八重霞　　判者　稲雄

当節以道々一句ものされとも追期の農業養蚕等実に肝要の節にかゝり候に付此度の雅会は御見合せ候しまゝ御承知

于時明治廿四年

岩代福島六丁目
金石堂石印

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島

正風継林社

まさゝに絆けし人形をこほしけり　士朗

春の夜や拾ひしまゝの捨串　曉臺

すゝきをあらむ庭口に遠し春の山　卓池

うくひすや春の寒さに里わたり　梅室

竹にいさ梅にいさとや鶯きあめ　一茶

若松に鶴のきつる春ぞと　道彦

折釘に烏帽子かけたり春の宿　蕪村

ざつくりと畑の枯木もかすみけり　杉風

一 貝ハ芳宗匠撰

なのしさは月夜に近し　軒の梅
小雨のを残たつきは梅の笑かな
蕊皆有ふ娟娟きし也　みどり葉黄
きのふまし雲のうしろや春の山
白魚も女縁情の淋しさしき
春をしらしあの花や扇打
手をつくさ武家も無しや朧月
行とあくなふの長ほも草にかり
ふ見まもまとハあかり出月朧
うるくの千鶴の毎ま川千鳥
蕾み窓き縁まぶ月蕗のつや
き通ハ蝶をふしむ柳くの郷

粒雅
小海
暁香
菊月
主子山 多ゆあ
楳園
海心
知明
気山
露山
素香
佳海

小家まで比なのしみや月と梅
広掃も接の嬉しや松の内
明家や明まで芽出る草の料

秀逸

鶏の家までつくる田や塚
年かりて請るを明治や春の為
四五輪ハ未だ眼に楽し初桜
蕾まで通生し涼る大弥ふの春
ゐ息也ゐ乃きハなつ餅やりけ
蕗実や花と梅花き梅の花

和水
月忠
重把
東岐 猪石
潤月
一陽
笑山
苔水
文

〇

。

梅柳さびしきましめて暮にけり
蓑着さ日和の留守の川菜の花
○
燕へ来て蓑着るや春の燕
烏帽子着さ人もの懐や春の山
○
さす月とのむ宿の露の郷
花に鐘寂しき物より暮にけり
花ちれし暮ハたのし稲妻
春み出ぬるも世のし蝶が君
捩綱に人ハ出ぬもしするの月

補助 一陽
若水
催主 之止
中宗
判者 舞香
三河 八十三翁 道宇
出雲 七十九翁 曲川
東都 七十?翁 肴宜
七十九翁 恩山

夕風や [illegible]
蓮葉に [illegible]
ちりと眺めの [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大坂 七十?翁 雲里
西陵 素山
大和川 壮山
東都 梅如
屋伝 由海
仝 静如
仝 其しめ
東都 弥美
下総 地斎
上総 素古
東都 採花女
仝 甫
越後 紫坊

明治廿四年六月分

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島
正風俳林社

[seal]

連歌師の去年もしや明れむ冬の杜　許六

陸沉堂宗匠撰

秀逸

手をもつて筆採る朝の寒さ哉　佳洲

蕭まれ行まゝられけり冬の瀧　一陽

陰枳の纏ふて花咲まくらひ　狂雅

降と見し空や寒さの身に餘る　、陽

雪吐や朝魚川岸の鯛の色　陸前 晴遊

三　七

寒月や精まきつる風の音　吐涯

世帯渡む斷や小秋の置炬燵　秋雨

水鳥も枕合せぬ夜明り　春香

一貝庵宗匠撰

寒月や風走り行水の上

旭さす水にわ光る氷かな
二三軒むかし餅つく音かな
若艸や空色染し桃の鼻
手入して程よく咲かせ牡丹
艸の名の司を持や福寿草
橙子の色は眼に付寒さ哉
手を借りに来て人をさくや煤掃
寒梅やたゞ一日咲備み

秀逸

ゆつたりと総はうへて眠る山
庭松の枝よみそろへや雪景色
打ち負て咲さかりなり帰り花
霜月の風吹は透す木間かな
竹の雪朝の庭のちらしかな

止笑　湖萍　高千代女　小國 豊　春雨　月窓　庭坂 摺石　諷月　庵遊　半窓　狂雅　暁涯　庭坂 花翠

雪晴れ見るにあはれや千松島
寒月や積ざる庭の音
小春日の空色や小田の遠櫓
寒声や軒をかすめし風で凌

三　七

花と咲て淋れなし寒椿
踏入れば袖も霜置し信夫山
茶梅や手に見返きれい好

○

曙の志づかや雪の降るあと
てらてらと日脚みぢかし枇杷の花

○

冴まつれ枝実あり行五位の聲
椿落のやさしいことよ後ろ向

一陽　暁遊　一陽　露山　暁遊　北洲　狂雅　補助 狂雅　若水　催主 三止　半窓

○御社の掃除やきれも煤拂
きくらまとちる杉に似し神楽唄
○すつくと菊の色や柵のしら

判者 東京 銕蜘
東京 尋香
八十翁 忍山

明治廿五年十一月分　第二十九回目

月並句集

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島
正風俳林社

霜月の霜の光りや梅の花　支考

陸沈堂宗匠撰

秀逸

美しう秋の頃より雪の朝　晴遊

ふ足なき庭桂のや冬牡丹　佳洲

杉杉のいろ清まりぬ神迎ひ　吉柳

冨士見ゆる泊りや濱千鳥　佳洲

青海の風てちるの枇杷の頃ら　陸前 暁霞

山茶花やよい日のあたる籬垣　庵遊

江にうつる岸の光りや鴨の聲　月窓

背負ふてる浮世の種し木の葉籠　東京 自由

松原の音を背にして巨燵かな　青枝

大空に鶴の翔を伸まかな　仝 狂雅

感賞

神社の道へ出てとる頭巾かな　狂雅

かちわしの止めハ秋ち三十三才　桑里

降る音も風と交りて夕時雨　小園 豊

秋蓉庵宗匠撰

差ほとゝまほさぬ朱の霰かな　春香

神雪や菊ま痛き庭掃ひ　松山

木兎や枯木ま淋しき古社　棋圃

山一ツ越ゆれハ里の時雨かな　立子山 法山

神の社の流れ来てや千鳥かな　小園 高千袋

初雪や宿をまちやうむし夜　春雨

見こうくれハきわる物あし冬の庭　止笑

掃まゝで見れハ山なす落葉かな　半悟

十月や枯木より出づ雑木山　佳雪

秀逸

山茶花や店半ひ尽くし咲ふ　東京 庵遊

上京の寒明けや鉢叩き　石居

炉開や宇治信楽の花のかほり　、

上嵯峨八日の月かくれて時雨かな　、

落葉降るあと時雨たる山路かな　狂雅

小春日をみすゝ軒へ来る雀かな　月窓

声の風をみぞれ雪の朝かな　思按

雪の道茫とさけて通りけり　半窓

若し人今頃ハ木枯れ山城の雪見かな　晩香

袴着や供まちうけし同じ年　若水

鶴下りて出来つゝある冬田かな　狂雅

蟷螂の其直まなつ霜枯かな　露山

ふ足なき庭の植ひや冬牡丹　佳洲
大原に音見せんし時雨けり　露山
足跡を慕ふ枝道や枝の雪　、
隣ては味折る音や小松時雨　青枝
以切や庭にさ珠しき萩枯葉　、
小春かや背戸山ひかる松葉かき　雲鶴
少あるの鶴舞ふ空や松ちかひの　誠月
舟取に追れてたつや群千鳥　庭坂 摺石
きのふや茶茶作りの木ゑふみ　秋雨
ありけする柿眼立り霜の朝　誠月
畑ハ麦蒔きされも冬植ひ　暁遊
降り晴む雪の影ちり寒苦鳥　陸前 静保
身のうの気免忘れて雪見かな　露山

富士見ゆる浦ゝくりや小松時雨　佳洲
美しう枝の所まかり雪の門　暁遊
枇杷咲や常に見馴ぬ冬の香　三止

感吟

我馬に物云かけて枯野かな　晴霞
月ハ荻松の夜ゝあくゝ時雨けり　露山
四五輪て見せけき庭や帰り花　、

○

打波の音も絶て霜の都　補助 一陽
末ハ枯の草ハ根にあり帰り花　狂雅
幾筋も道の出来たる枯野かな　苦水

○

笑ハ直ぐ社の杉や冬の森　催主 三止
商人が鯛を買ふ日の時雨かな　半窓

○御火焚に通りかゝりすゝうつれけり　判者 袋蜘

○咲くかと起まわりみかりを杜哉　東京 菁々

心匠有仙人交る詩くちの春　七十九翁 丕山

明治廿四年十二月分　廿八回目

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島
正風俳林社

陸沈堂宗匠撰

雪の杖ハ物志つかなる山の家
幸ひニ綿とり仕舞ハ小春かな
御神代馬のいかめき清し枇杷の花
梅の霜雉子かみそめし足の跡
音聞て出れハ跡なき時雨かな
冬の日の掃よくすまき落葉かな

秀逸

吹風の水に光るや冬の月
盛り砂のきれ皆に志める時雨かな
からまよりれに多き枯野かな
ちろしほ松の手ぬ縄ゆるみけり
うしろから日の暮てくる枯野かな

秋雨　雲鶴　高千代安　陸前 静保　黄山　柳芳　狂雅　半窓　粧雅　誠月　公

日切やかれしか　翁
由儀ハ　小紫

花のある葉に氣色あり帰り花　露山
茶の花の清く日和や帰り花　佳洲
さらゝしさく一しきり楢の枯葉かな　一陽
何を巣にして日を経るぞ浮寝鳥　柾雅
千早振神代を今に神楽唄　陸前 晴遊

感賞

不自由も未来ありけり冬構　調月
戸に風のあたらぬかたに来る時雨かな　一陽
御社に鶴の声きく小春かな　柾雅

○

芳秋舎宗匠撰

初時雨雲晴れ月にきほれけり　庵遊

猿の影耳を貫く霜柱かな　陸前 晴霞
遠畑に雪菜つむ日和や初時雨　松山
鶏頭の色よく見えぬ冬日和　立子山 棋園
留守の家もれ猫いや枇杷の花　晩香
初雪に幸ひいふの日の朝　庭坂 楫石
三日月のかけありけり冬木立　青奇

秀逸

僧といふ碑を読で拾ふ枯葉かな　誠月
菰掛る葉に見かくれす帰り花　露山
うしろより日の暮て来る枯野かな　誠月

三光

小春日や出でる門へ人の来る　苔水
松杉につれなき色や神無月　晴遊
十月の空一もくやふじの山　半窓

○表戸けさまあれてちはし冬の月
背戸山の枯木揃ひし小春び
○さゝ波れ上りしをと知れ乍り
は切ヨ拝領物の枝露ゟ
○御留の旅人ゟ出て祚送り
金屏の鶴も霜の並ひけり
○神籬ヨ開き初めり六ツの花

明治廿四年十一月分　第二十七回目

補助　狂雅
苔水
催主　三止
半窓
判者 須賀川　袋蜘
壮山
七十九翁　忍山

稲荷神社奉燈

月並句集

岩代福島
正風俳林社

梅か香も籠りも立まれ神ひとの月　支考

陸沈堂宗匠撰

紅梅に去ぬ句空夜也女良　春香
梅咲や覚の水にあまる春　庵遊
置土の乾く匂ひや梅乃花　晴拾
のびくと揉軒秋とならぬ老翁　秋雨
突揚る相ゐも家味とし岩離　小洲
元日や降り積む雪に花ならん　月窓
春はまい蓬莱は御也薮の奥　晴渚
夫の身に似ぬ手細工や榊の露　様圃
春風を袂に入れて初すへり　春雨

左義長や爽ゆ雪の花が降敷　高喬

鶯の初音もらすや庵の山　六月

一人旅思ひ出すよ花の春　晩香

風流な日に雨の降る柳かな　露山

元日や家毎に清き鶴とよし　誠月

初ちやみどりかゝれる海の面　止笑

梅さく外山は低し夕雲雀　茂山

年立や松のみどりも色まして　幽谷

庭の戸は鎖したまゝよ梅の花　湖月

初かすみ鳴や近江の最上井下　佳游

秀逸

雨の白梅のつぼみほころびかゝり　春畊

森ちるや程よき程に鳴蛙の外　東京　青枝

ひと声て鳴くまゝ鳴蛙の郷　桂雅

琴の音も掛けし梅のうつり香有　春枝

うちつ下手の噺し上手や春の旅　東京　自由

称ふ称ふの社桑色ある月の梅　杏水

まゝ蚕の桑色を春のたのしみ　中野　交文

眠い眼も香にさめたる梅の花　湖萍

春雨や孫と休みも茶臼挽　何來

秋も半まさる音して老の声　苔水

感賞

寫む家に花も多し我庵さ　自由

着飾る衆生は花也京の町　一陽

舗免ん波も静やこゝからあね　一迎

○

梅か香やひまな一日を茶と味　補助　桂雅

御うるみの鏡は生きるに真足梃　苔水

梅よ月なよつらしこゝ秋と知すよけり　何来

○

家へ来て搗かとんとの亦あり代　撰主　三上

祝ひのけいろいの寿は隣家也　半窓

○

足あるに力足見るや山松風　花志　宏皓

○

神の衣に寿遠し麻積の老の弓　八十翁　恩山

明治廿五年二月分　第三十四回

梅をまのうちらくや隣家の暁の声

野路や日ハ忘れしか月細し

明治廿二年 十二月

判者 鶯嬉

七十八翁 君山

虎杖

三也

面白く向ふたすきや袖めくる色

萩も短く着して風の千葉かな

折ともせハく〵なりかり宮の門

○

まくら辺ハ○なり金ふく眠る山

嵐の蔓捨かや冬も年用意

○

葡萄や情あるをくしく堀なとつ

○

松のけや女房まの非ぞかひ

菜里

何来

調月

補助 其耕

何来

撰主 之止

半窓

松に月山ハ暮来るく眠りけり　幽水
更るゝ梢るの花のし　里神に　巴水
宿梅や捨るすゝしきくもしを　梁川 再児
小春日やみとりハ松の花なのう　梅由
麦蒔やるとりなのみて牛の飯　秋雨
除夜の灯の晴りの花由方戸口に　苔水
冬の川と流り去ゆしなり水の色　春畊
曙は乱をしてもとる衣の寒ゝの家　佳海

秀逸

冬の水をそゝるゝ小草ゝの鄰　一陽
雲晴の寒しきと冴りぬ花鶴　晴趣
形をしむ松梅笑みけり神明宮　一陽

大根洗ふ人の肌ゆく寒さゝの郷　静丈
娓々とへ枕に当るや冬牡丹　春斎
蕊芽て羅おもし昼の御ゝのな　氣山
三日月の雲宵に冴えて寒空　清月
冬ぬえの松のしき鶴のし宝の梅　菓山
遠色にあふけさ如しや茎ゝ穀　高手代女
庭に松植る小春の日和ゝの事　晩香
渚のあるは蝋空し鴨の聲　如辰
山の譜まにとゝやしに冬の月　真坂 花翠
言をしみまる種つのる寒ゝの形　真坂 狸雅
柴の戸も趣の増りゆきゝの館　梢石

稲荷神社奉額

月並句集

当代ふくしま

山風湖社

催

福島町慈恩寺観音奉燈

月並句合

催主

蜂庵宗匠撰

道守は筆置音や雪の窓　東京　自由

やさしみや小萩にまじる鳴小鳥　月窓

垣外にそよすりの庭や二十三夜　晩香

旭さす外の志ら光る氷かな　上笑

人通り静になるやつもる雪　青柳

丹誠乃花咲々年の暮　湖萍

年内まこむ鍛錬や節の袖　高千歩

軒下に刈しの出来る雪たまり　春雨

ちゝ拂て立付ます懐かな　雲雀

音もなくいつ積りしや外の雪　松山

家深の夢なつかしなく千鳥　東京梅に　花月

雲一つなき天気なり山眠る　露山
御建にしも浪速紀行寒の礼　半窓

秀逸

松柏は只ゝ一色や冬の山　静保
落ちても銭知らずてむかし冬の堀　一陽
花咲て冬は木ながら梅哉　其徳
二本松
浮藻冬立や大工はあまり板こ　古琴
素庵の人とてさなし年の市　一陽
鉢たゝき柳樽まゐらせん佛は日　晴淮
寒垢離や涼しき所を識りの素足　晴携
水仙や壺掛て居る石に限　独雅
吉野の蝶のゆくゑ追ふ雪の泉　芦水
雪一明枯木ふせてし寒の入　鹿遊

日は冬のうつろひきぬ雪の上　一陽

感賞

大会銭焚は来て帰り三十三才　古琴
三方絶行の日立や杉納　独雅
松作りしうつる煙のけむ師走哉　芦水

旅巻

青て居様

○

再考

松柏は一色や冬の山　静保
ぬれて来ていよゝ少し三十三才　古琴
日の色は只し起哉雪の旦　一陽
炉にまれた浪一ありし寒の礼　晴携
激は音にうしろ小寒紀巨燵哉　古琴
降る日に向て羽毛の北小鴨の礼　秋石

夢懸の見る明ゝ雪のかりあつめ 一傍
秋たゝ夏になりし我懸の勝浮て 拄雅
　　　　　　　　　　　　　　　拝之寿
くる路ゝ路を七重八重会佛 拄雅
楫焚て宗らの声の清別しの船 芯月
花壹
見る物の皆春めくや年の市 壽山

○
すゝ旅よ旭のさし霜のはな 補助 秋雨
常に燈しゝけれ尤夜の雨 三止

○
松風の音なき雪のつもりけり 催主 謝月
志心なこしあか枝よ年の坂 拄雅

○
遠里や並ぶ家の雪けしき 花評 苔分

常盤木の色も殊時来て梅の花 東京 判者 採苑女

○
意(?)筆大隈の藪に河ましゝく 八十翁 恐山
風のかたにふりかゝりてしまし 袋枝

明治廿五年一月十六日 蓬㷀

秋のみてぐら

皇大神宮奉額俳諧歌　　信夫郡庭塚村

兼題　社頭菊
　　　花尾

取かけし木綿とや見らん神垣ゝ誰か手向しか白菊の花　　荒井　柳の舎梅員

吹風の音も淋しき夕まぐれ野邊の尾花ハ誰まねくらん

御社の幾重黄金のちりはめて光りまハゆき菊のしら露　　和風庵假名久

吹風もしつかに浪の立ぬるハ穂坂の小野の初尾花かな

みやしろハ曇りなきゆゑ底澄しよるへの水ゝ移る白菊　　梅下庵春住

咲みつる尾花の露ゝ月宿り光りてりそふ小野のしの原

こと問し神代のむかし忍ふ哉むら菊さやく風の宮居ゝ　　永井川　丹治伊男理

秋風の立野の尾花なみまより見ゆるハなやし蓬生の宿

みつ垣の久しき世より咲菊の千代の齢ハ神もめつらん　　ナリ川　錦園千條

千種咲野邊のけしきに立もれて招く尾花そ秋の樣なる
昨日けふ露置く菊の花かつら掛て八千代と神祈るらん
永井川　光月堂安永

秋の野に招く尾花の浪の上に月のみ船のほの見ゆる也
そのかみを信夫の山のみ社に色香ふかめて匂ふしら菊
ナリ川　玉岡堂千員

初尾はな穂に現れてかくはかり誰を招くか野への夕暮
常盤なる色も替らぬ松の尾に千代を重ぬる白たへの花
山田　花廼門千守

秋風のいたく吹日は乃ゝ浦尾花も浪も立さわくらん
詣つれは老せぬ菊の盛りにて匂はたえぬ神のみつかき
大モリ　桝の屋歌子

夕くれは通へ路しけし路のへの薄や誰を招くとすらん
千代までもかはらて匂へ菊の花神のちかひの色を重て
仝　花水庵千陽

風に浪よせくる野路の花薄かつきゆけとも濡ぬ袖かな
額つきて願ことまつる神垣に祈るも菊の花のみてくら
庭坂　見附堂明眞

秋立ては野へも青海と見ゆるまて風に浪よる初尾花哉
み社の神のみ前の池の面に移る黄菊は八重に見えけり
仝　明月堂茶住

押並て山のうねうね風の手に友なすあしと見る初尾花
千代かけて神に契りや結ぶらんいかきに匂ふ露の白菊
加藤可笑

秋風を招く山邊の胡枝花すゝきそよけは匂ふ我袂かな
神さひて幾世をふるの神垣に聞はや物を菊の名たてに
トヤノ　佐藤美連

岡の名の行來の人も繋かれて招く尾花の絶もやはする
結ひあひしくさの袂の露ふけて月影をもる初尾花かな
仝　佐藤長民

千早振かつらの宮のみやぬちに匂ふもしるき長月の花
神垣に咲にし菊の露ちりて五十鈴の川に流れそふらん
庭坂　鈴木晴月

くれて行秋のかたみと見る物は尾花か末における露哉
日のもとの國つ社に咲さかえ千代よろつ代も薫る菊哉
仝　自然堂

うちなひく尾花の末ふ置露ふ宿れる月の影そにならぬ
幾秋か霜にも枯す匂ふらん神代のま丶のみつかきの菊

トヤノ　春の門千慶

百草の花の色香もそれなから招く尾花の元ふきふけり
み社のゐとりふ植し菊の花いろも神代のま丶ふ咲らん

水保　器水庵一守

風ふけは靡く妝はなれ海原の浪とも見ゆる秋の野ら哉
あもります神代の儘ふ霜置て色香を朽ぬみつかきの菊

トヤノ　佐藤保

花薄穂にいてにけりな吹風ふなきさの岡の露のしら浪
千代かけてみいつを祈る神かきに匂ひをそふる白菊花

ミヤキ　佐藤隈北

招くかと見れハ濡あふ朝露に親しき物ハ尾ハな成けり
み社のまかきのきくの咲榮千代よろつ代も薫りける哉

庭坂　玉雄

山のはに月ハ入ふし淋しさをほふあらハして咲尾花哉
秋の野にたるて尾ハあの咲揃ひそよ吹風に白浪そたつ

仝　竹の屋縁

静かなる天の戸影にをミ菊ハ匂ふともなく盛り成けり
あまてらの神の社ふをミ菊ハ老せぬ秋の久しかるへき

ミヤキ　元郁

さミ尾ハあ繁る山面せ吹風ふ浮伏す物ハ浪かとそ見る
初霜の置とハいさやしら菊の神のまかきにさき匂けり

庭坂　千員

まちわひて逢隈川の夕風にきしの尾花も舟まねくらん
大神のやしろにうゑし菊のはな錦の如く光りか丶やく

仝　清浄庵審恬

月の夜に草むらさけて咲しこそ一際目たつ尾花成らめ
み社に八重かき造る菊の花つまま千年乃数をこめけん

吉倉　梧の舎長徳

まねけ共訪ふ人もなき浪花江やうら淋くも立る尾花か
取もあへす手向の山の白菊を假のみ幣とかみに捧けん

双林舎友春

月影に見えつ陰れつ小夜風ふ寄くる尾花野への白なみ
露なから折て捧んみつかきのみもひハ菊の雫なりけり

執事　杉の舎花犂

また殘る暑さなからも秋來ぬと尾花ハ穂にも現にけり
千早振かみのみ庭の白菊ハ今朝置く露も曇らさりけり　仝　菅才堂道弘
小夜更て通ふしつくの數落て尾花か元そ今朝ハ露けき
み鏡に移るハかきの菊さへて幣と手向も自つからなる　催主　靜香庵擢石
うち向ふ其方の野へも此野へも見ゆる限ハ尾花成けり
みてくらのかつと捧けん宮人ハ黄金色なす神垣の𛀸之　仝　漸進舍南柳
淋しさハ招くとなしふ秋深み尾花か袖をつゆ重けなる
夜や寒き綿やきせなん片そ木に霜をくところの白菊の花　撰者　拷園信清
長月ハをのか時とや山鳥の尾花ハほふも出にけれかな
住の江や松にましりてさく菊ハをなし千代をや祈合鈒　仝　毫舍千巻
たちよれハ事そともなし穂薄のまねくや常の習成らん

天	ラ	五十點	一叟
地	ア	四十九點	三止
人	ラ	四十九點	一陽

五	ラ	四十九點	擢石
	ア	四十六點	梅山
	ラ	四十三點	花翠
客	ア	四十二點	知水
	ア	四十二點	晴月

短夜の明け殘りたる木の間かな　福島　梅由
竹にまた雨のしつくや夏のつき　同　一陽
稲のはなさくや朝から日和くも　同　秋雨
門をくりする間もひくや鳴子繩　同　半悟
夜やしつか枕につけハ秋のこゑ　同　春陽
留守の間も届くやかゝの庭掃除　同　知水
わきいつる水の冷たし苔のいな　同　苔水
あさかほや茶巾のかハく利休窓　同　子月
涼みふね見ゆる座敷や夕すゝみ　同　随圃
はゝきゞや庭草むしる手にすかる　同　晩香
寄るなみも長閑な海の廣さかな　同　素舟
茶咲やそこら掃さへ氣の於ける　同　狂雅

生かへの乾く天氣やかへりはな　同　蚯歌
杖を曳く右も左りもむみ野かな　同　春香
社家町ハ晝もしつかな若葉かな　同　半窓
明ぬ間に寐くら離れてはるに鳥　同　三止
只居ても人ふ見らるゝ相撲かな　仙臺　一東
捨て來たあつさの戻る座敷かな　同　南河
岸ふ寄る鴉のから巣や初あらし　同　松玉
雨とのみあるや五月のたひ日記　同　晴心
智惠の輪をとくや鬼灯耳にして　同　有め智
ゐまゝ過て疑ひをとる木の子かな　桑折　半湖
切火打つ光りのさきや初からす　同　一香
雲切れの月ふ聲ありほとゝぎす　同　御平

水も澄ミ心もすみてはきのくま　庭坂 摺石

能く聞ハ雨よくきけハ落葉かな　同 梅枝

ふきまくる風の勢の中より砧かな　同 茶佳

山の端にかくるゝつきや不如帰　同 晴月

あさきりの晴間にたかし羽黒山　同 養恬

雨晴やかき根を傳ふかたつふり　同 松浦

ちらほらと里も續くや梅のはな　同 柳雪

朝日さす障子にかけやはつ胡蝶　花翠

かき替る種井の水やはつかわつ　花郁

行人もまたゆく人もかすみけり　友春

草木から移ろひそめて秋のいろ　桂月

卯のはなや夜にいる際の一明り　玉雨

友の來てはなしの盡ぬ月夜かな　道弘

ほんのりと沖の夜明や稲のはな　可遊

ものうりに行そ雪吹のわかれ道　ミヤキ 隈北

見るよりも聞たのしさや虫の聲　黄粲粉

御降や一しほまさるたけのいろ　タカユ 朝香

川骨のなかや作塲の徒行わたり　雲静

はな野まて植つゝけゝり鶏頭花　吉倉 梧台

行燈のきへて興あるつき見かな　同 南柳

○

賑やかに見へても淋しあれの山　補助 花翠

寄るともの今年もをなし月見哉　同 道弘

○

見てゐれハ見ゐにて昇るや稲の露　催主　摺石

月の出て足なみ揃ふ弦まりかな　同　南柳

○

むらむらに神樂囃子や豊のあき　判者　有隣庵孤邨

見る中に見れかき根有菊のはな　同　陸沈堂袋蜘

○

秀逸

雨とのみなゐや五月のたひ日記　仙臺　晴心

賑かふみゐてをさひしあきの山　花翠

朝日をす障子ふかげやはつ胡蝶　同

ふきまくゐ風のなかより砧かな　茶住

草ふ夜を殘してあかる雲雀かな　仙臺　松玉

岸ふ寄る鴉のかち巣や初あらし　同　松玉

捨て來たあつさの戻る座敷かな　同　南河

田植したく／＼たひれ抜る青田なか　同　一叟

智恵の輪をとくや鬼灯耳にして　同　有め智

離れ家によゐ水も有か兒はゝな　福島　秋雨

あさかほや茶巾のかハく利休窓　同　子月

鶯やあろひてとにハ富む在所　同　一陽

其妙

見居ても人ふ見らるゝ相撲かな　仙臺　一叟

わきゐつる水の冷たし苔のハな　福島　苔水

ふとる樹の細るほとさく櫻かな　同　梅山

雨ちらと月をすはして晴にけり　　判者　有隣庵孤邨

秀逸之部

手に取て一葉のあとを見上けり　　福島　半悟

留守の間も届くやかゝの庭掃除　　同　知水

はき寄し木の葉に聞や夜のはた　　庭坂　摺石

夜やしつか枕につけは秋のこゑ　　福島　春陽

行人もまたゆく人もかすみけり　　同　友春

かき替る種井の水やはつかわつ　　同　花邨

能く聞は雨よくきけは落葉かな　　庭坂　梅枝

門をくりする間もひくや鳴子縄　　福島　半悟

稲のはなさくや朝から日和くも　　同　秋雨

竹にまた雨のしつくや夏のつき　　同　一陽

はと過て疑ひをとる木の子かな　　桑折　半湖

短夜の明け殘りたる木の間かな　　福島　梅山

水も澄ゝ心もすみてはきのくさ　　庭坂　摺石

賞感

軸

神籬や秋をときえさつた紅葉　　判者　陸沈堂裳卿

明治二十三年庚寅秋葉月望后四日

岩代福島町十一丁目
印刷所　昌榮堂

非賣品

新撰明治花實發句集

螺贏窟藏板

附言

此集雅兄之立○●▲×印を附するは秀逸初とす
○ハ老鶴の評とす以下我此集應募とかとす
○ハ巻中七点とし●より以下口吟集の句とす其ち秀
逸とし佳とす▲ハ十二佳とす×ハ十三佳與撰者の
句とす

若草やさし何の人の往来かなし　●芦舟
いかせし八州の□く廣き家の國　東京　法ら
みる日は海や与え□の□□三□ちさ　◇、

柳

踏むし□□□□□□□多柳　、青宜
見渡し八州園もの□□柳　羽後　陰風
割て殘る新芽の□□柳の□　東京　東鶴
好きまた□に□□□柳の□　、一清
池の上□□柳の□□も□□　陸中　桃川
晴れ□□柳を□の見の眺め□□　、湘江
まよ柳の姿□□□□□□□□　東京　愛海
うち翻し□□□□の□□柳哉　○溪流

[illegible] 甲府 野分

[illegible] 桜島 一陽

[illegible] ●松虬

[illegible] ▲佐ら

[illegible] 、

初午

[illegible] 尋香

[illegible] 東京 虚吟

[illegible] 私淑

[illegible] 佐ら

[illegible] 東京○佐けまら

[illegible] 、 太逸

[illegible] ●玉香 くわかみ

[illegible] 遠州▲蓬仲

燕

[illegible] 愛海

[illegible] 東京 柳雪

[illegible] 尋香

[illegible] 佐ら

[illegible] 私淑

[illegible] 東京○吉則

[illegible] 、 若甫

[illegible] 福島 何来

[illegible] 東京 雪花

[illegible] ●松虬

[illegible] 甲府 如水

[illegible] 東京 ▲何きら

[illegible] ×よしの

接木

[illegible] 東鶴

[illegible] 東京 史風

[illegible] 私淑

[illegible] けら

[illegible] ○松虬

[illegible] 東京 壽香

[illegible] 若甫

[illegible] よしの

[illegible] 松声

[illegible] 共楽

[illegible] 桐生 ●明賀

[illegible] 東京 桃里

[illegible] 甲府 ▲如水

永日

月並並題之句合第九集首分

初午 撰 梅木

すゝ[illegible]庵宗匠撰

天〇〇〇 亀湖 地〇〇〇 月花 人〇〇〇 一夢

番外 小しは 吉三 松丸 浅流 耕月 〇〇〇

〇七印

初午や伏見へ行のりの幟は[illegible] 枕里

初午や[illegible]の小坂のさりかり 素兵

はつうまや花の[illegible]ゆかしこのまひ 遠州 如浦

[illegible]乙女の丸 [illegible] 松丸

つま[illegible]とや何[illegible]袖のうら表 [illegible] 花鳥女

[illegible]上沙はまのを[illegible]のくる カヒタ 悟空

[illegible]乙女の丸、 一夢

[illegible]つる[illegible]の[illegible]、 よしの

[illegible]橋、 何丸

首をしむ心もなくて片く柳つはめ　子きし　牛込　孤峰

蝦夷の国まで花咲て梅の下にも蕣哉　古松

火桶をさしかけていふて梅哉　杭里

わか宿の月を見つゝ宗祇忌　仝

世の中も仙人の身になる梅哉　季香

てふ見ハ香けてゝ白つる麦畑の野　其節

風まゝ楼木に陶をかけよりり　神田　一釜

除りて八文か空ひ宝の梅木の野　以上　太逸

○八印　短冊ミゝ

勧年よ嶋をし　めくり回舎か　亀渕

弘年へ寄まるゝや　かり舟　小はし

乙名の来るまる相つす回舟くの野　吉公

庭のよむ龍をゝ出てつゝ木の乳　明賀

当やとは何をし　八窓よ梅木代　子きし　五性示

○十二印　全。

つゝめ添て国の湯気を眼かく　琴雨

おまる拝て出つのしくかる梅哉　遠州　月乾

○

春風や野まて一筋の光けし　清　企　松洲

○

山の尾まで種とてまて郎哉

判者　雙海

非賣品

新撰明治花實發句集

螺贏窟藏板

附言

此集雅名を立○●△×印を附するは無點を初とし
○を秀逸の部とす以下次第に秀逸ニ加へとす
○を巻中七點とし●より以下は第一等の句とす其中に秀
逸あるは佳とす▲十ミ佳とす×十ミ佳且稜落選の
句とす

一具庵尋香撰

天㊥○×松虬　地○××文子　人㊥△清ろ

番外　芦舟　松声　秋洲　開花　一陽

此月並ハ松浮派の句並の例なれバ ㊥×△ヨリ ○×△マテ を並八次第に八点興接落選とす 八ミ佳以上句無ミ

新撰明治華實發句集巻之一

浦野私淑編輯

一具庵尋香撰

若水

若水やうろく撰みてつゝく　東京　寿北女

若水や器計のうちうし若水　、　尋香

若水やまつ川清き水汲しめ　、　○松声

若水は松明の緑帯取さき　甲府　開花

若水やうしはし紋の響ひ物　、

若水は哉蒸し蓮其香哉　東京　私淑

若水汲ゆめしたけた一雫　、　濾錦

わかみつやたけゆく命を動鏡　、　文好

よみは華ちらちらりと八の花　甲府 ●溪流

よしの川や出ありまして門垣れ　東京 ▲芦舟

鶯

鶯や谷郎八ゞ摘あはれ　、 千畝

うぐ飛すや軒の玉水ゆるみる　、 伯志

鶯も鳴や雪ゆて菜のひと風味　相州 華君

宿々来すみありなり川の一也垣一重　武州 角々

鶯やはつきゝして杉く庵揚除　甲府○ 耕月

鶯も来まはしちへや鍵すゝめ　松声

鶯やるいめぐちむゝ亭　東京 芦舟

鶯や谷のなきに残りんちて鳴　馬風

宿てるすを鳴せてとる蓮子外　武州 松虬

鶯やとし行る人のかしかる　●芦舟

ゆふせし鶯の鳴く偕楽の國　東京 はら

みちは海やうゑの茶上番まで　▲、

柳

陰ゆし一もたてゞ夕柳　、 青宜

人流し、水国ゆうや夕柳　羽後 陰風

割て坊千新芽も柳の柳し　東京 東鶴

ゆきに花は露つく行つの柳の松　、 一清

ゆきも止る柳の中の風吹れ　陸中 桃川

咲きもうり柳の行の気の眺の松　、 湘江

ま柳の残のもを香海光　東京 愛海

うちも組し一面みやすての柳哉　○溪流

お傘に見返るつまや春の哉 甲府 野合
十歩程追て見来る梅の郷 福島 一陽
柳さや柳を待つ夕ひまり ●松虬
こゝ有をふところ住る春野のな ▲はら
曲り江は深めし堤の春野の郷 、
初午

國[illegible] 昭36. 3. 6

月並[illegible]三題会[illegible] 兼題 柳
明治廿五年[illegible]
すゝ[illegible]庵[illegible]撰
天 [illegible] 地 [illegible] 人 [illegible]
[illegible] 松淑 松虬 琴高 仝 [illegible]
○七印
あかるい白[illegible]はあけす柳の窓 松湖
[illegible]撰[illegible]やかる口 六生
[illegible] 撰月
二[illegible]柳の井戸 甲府 寸雪
[illegible]水[illegible] 下谷 如舟
[illegible]柳[illegible] 吉水
[illegible] 乙雪 琴三
[illegible]柳の[illegible]柳の南 相州 夢雨
[illegible]柳の南 一燈 悟南
[illegible]柳の南 空

静さ和柳しと待ち山ふかなかり　武忍　松虬

青柳や拙とぬかし沈の花繋む浦　本郷　静湖

○八卯箱更しけり

切ぼしりて家鶏々出や宣つらま　甲府　耕月

黄金色や左はし惜花静かし汁　深川　去則

宮まひすや桝のつきぬをかならん　静湖

記風し桜けりすり柳うな　梅窓

深くしらい旅もはなめる柳の柳　スルガ在　桃里

○すゞけし[illegible]

みの山本の雲をぬけ出草屋の角を貼て去　松淵

黄金色や一ト葉識の再ききく　揺月

○

早わとは川振り飄々たる柳の音　企　松淵

○

若葉の露を止して一老雄と龍宮有乾　判者　愛海